

## 『精神分析の裏側』1969年11月26日のセミナー(試訳)

イタリック⇒太字、アウトライン(ミレール版)

ミレール版における図以外の図はSTAFERLA(<http://stafarla.free.fr/S17/S17%20L'ENVERS.pdf>)の図を参照のこと

p9.

### Ⅱ. 四つの言説の提示

言葉を欠いたものとしての言説  
場は解釈の前段階を考慮する  
知と享樂との關係  
知を勝ち取った奴隷  
知への欲望

p.9) みなさん。またしてもです。どうしてわたしはこの講壇に立っているのでしょうか。みなさん方がいらっしゃってその援助のお陰(訳注1)なのでしょうが、特に以前からのセミナーにご参加の方たちも、この三番目の開場にまでお越しいただいたのは不思議です。この疑問に立ち戻る前に、申し上げておかななくてはならないことは、この講壇にわたしが立てるようにしていただいた関係筋の方々に対する謝辞です。法学部のお陰で、わたしの友人である高等研究院の何人かと同様、わたしもこの場所の講師として名を連ねることができたわけです。法学部、そしてその執行部のお歴々、なかでも今日ここにご参加いただいたル・ドゥフヤン氏には感謝の意を酌んでいただきたいと切に願います。

貼り紙を読んでいた方はお判りでしょうが、ここでは毎月第二、第三水曜日しかセミナーを行ないません。毎水曜日、この部屋をわたしのために空けてくださるのはご勘弁いただきたい。実際、他の水曜日は別の目的で使用されるのでしようからわたしはお役御免なんでしょう。

これとは別に、お約束できると思うのですが、毎月の最初の水曜日、少なくとも2ヶ月に一回、つまり12月、2月、4月そして6月の第一水曜日は、ヴァンセンヌ校において、セミナーと誤って予告されましたが、セミナーとは対照的に、別物であることを強調する意味で、『4つの即興』に趣向を凝らした名を付けましたが、これをやらせていただきます。そちらの会場にも既にその旨貼り紙をしてありますので、わたしが付けたユーモラスなタイトルをご覧ください。

(10ページ) ご存知のように、わたしの予告は当てにならないので、それをよいことにしていますが、言い逃れですね。申し訳ないとは思っています。よくよく考えてみると不躰なご案内をある方にしてみましたから。本心ではないのですが、こういうことになるんですよ。ある日のことです。その方はここに今いらっしゃるのではないのでしょうか。目立たないようにとご配慮いただいているのでは。その方は通りでわたしがタクシーに乗ろうとした瞬間、近づいてきました。

バイクを止めてわたしに話しかけてきたんです。

- 「ラカン先生ではないですか」
- 「そうですね、なにか」、
- 「セミナーはこれからまたやるんですか」
- 「ええ、そのうちにね」
- 「今度はどこで」

わたしも訳ありでして、かれもそれを察していただければと願いますが、こう答えたんです、

- 「明日は明日の風が吹くでしょうよ」

と。次の瞬間、かれは既にエンジンを掛けておいたバイクに駆け乗り、わたしは余計なことを言ったものだと呆然自失です(訳注2)。【笑】この場でかれにお許しを請うためお詫びを上げたい。ここにいらっしゃればですが。

誓って申し上げますが、周囲に苛立っている人がいて気障りで、それに反応してしまうことがあります、あの時はそうではなかったのです。波長が合ってしまうということはよくありますし、確かにわたしは気掛かりなことがありましたのでありますが、心ここにあらずという感じで、かれのことが気が障った訳ではありません。ただわたしが場違いな対応をしてしまったことは確かで、すぐそのことに気づきました。

さて、ここから今年のテーマに取りかかることにします。

1

『精神分析の裏側 *La Psychanalyse à l'envers*』と今年のセミナーのタイトルをつけることを思い立ちました。断じて、この「裏側」を、ここかしこで「ひっくり返してやろうではないか」とやるのが当世風となっていますが、それに

尚っている訳ではありませんので悪しからず。1966年のなかのひとつのテキストですが、『エクリ』は、各々は導入部がありそれに続く部分の節目となっていますが、そのひとつで『われわれの先人たち』とタイトルが付けられたテキストの導入部のことです。68ページは先人たちではなくわたしのディスクールとなっていますね。(11ページ)フロイトの計画を裏返してやり直すという意味でわたしのディスクールなのです。ドゥゴールの転覆より遙か前のものです。裏返して立て直すのです(訳注3)。

ディスクールについてですが、昨年、何度となく言ってきたことですが、これをどういうものかはっきりさせなければならなくなり、常にその場限りのものである言葉paroleをはるかに超えた必然的構造のように捉えました。そうした方がよいかと思い、そのように言い、そう貼紙にも書きました。言葉なきディスクールと。

p.3

実際、言葉がなくともディスクールは存続します。ディスクールはある種の基本的関係において存続しています。この基本的関係は文字通り、言語なしにはなり立たないものです。言語という仕掛けによって、いくつもの安定した関係が成立します。この安定した関係のうちにおいて、たしかに、実際声に出して発話すること énonciations 以上のものが記載されるのです。発話という言表行為がなくともわれわれの行動、行為というものを場合によってはある種の原初的言表 énoncés の枠組みで記載できます。

もしそうでなかったら、経験、とりわけ精神分析的な経験はどうなっていたでしょう。なにしろ精神分析的経験は、基本的関係において、まさに当の精神分析的経験が正しく示されなければ体を成さないものですから。超自我から精神分析的体験を語るの筋が通っていません。

構造というものがあります。他の語で表現はできません。この構造という語によって「…のかたちをした」ではっきりと示されるものの特徴づけることができるのです。この「…のかたちをした」といった表現を、昨年わたしはあるものの特別な用法でもって強調させていただきました。基本的関係の名の下で去来するものによってです。因にこの関係をわたしはあるシニフィアンとそれとは別のシニフィアンとの関係として定義します。これが基本的関係です。

(図1「STAFERLA」)

この関係とは、われわれが主体を呼んでいるものがどこから現れてくるのかを示したものです。主体とは、ここではシニフィアンにより他のシニフィアンとの関係において、この主体を代表するものとして働きます。この基本的なかたちをどのように設定したらいいのか、このかたちについて、昨年もそういいましたが、今年も時を移さず書くことにします。S1が外在性のものであること、そしてこのシニフィアンからわれわれがディスクールと定義しているものが生まれることをです。第一歩として次のように記します(訳注4)。

(図2「STAFERLA」)

さて、シニフィアンS1をここに入れます。円で描かれたものとの関係の結果を示すためですが、円についてはその痕跡をそこに置くに止めます。予めAの略字をここに記しました。これは大文字の他者の場所です。S2の記号によってシニフィアンの組み合わせbatterie が示されるようにしました。ふたつのシニフィアンであり、これは既にそこにあったものです。というもの、われわれの出発点では、ディスクールというものを、言表、S1といったステータスがシニフィアンの組み合わせに介入してくるものと看做されますが、これが固定されるのですが、この出発点からみると、われわれはこれらの組み合わせをバラバラにすることはできません。知と呼ばれるネットワークの構築を無効にするわけにはいかないからです。

まずS1がなにかを代表する瞬間から始まります。S1の介入によるのですが、目下のわれわれにとっては定められた場において、知によって構造化されている場においてということになります。そしてこの知を想定されたもの、これは ύνοχέιμενον であり主体のことです。主体とは生命をもった個体とは区別されるべく特別な線(\$におけるbarré-訳者)を表わすかぎりです。この主体には特別待遇の場所、地点が用意されているのですが、かと言って、主体が知の名の下にこの知をほしきまま手に入れる身分にある訳ではありません。

S1 → S2  
— — —  
\$ — a

おそらくこの知をめぐって、曖昧な点があるでしょう。この点を、今日これまで、みなさんに幾多のアプローチを通じてヒントを与えてきたのですから、ここでそれを強調する必要があるでしょう。ノートを取っている方たち、頭の中でそのことが去来している方たちのために、申し上げます。昨年、わたしは知のことを、**他者の享楽**と呼んだこともありました。

奇妙な出来事でした。このような定式化をそれまでは口にしたことはありませんでしたから。しかしこの定式化はもうそう突飛なものではなくなりました。そうでしょう。昨年、みなさんの前でこの定式化に十分な存立根拠を示したでしょ

う。話している際に特別反論は出て来なかったですよ。今年この話をするをお約束の一点とします。  
この式(主人の言説の式)を仕上げましょう。まず2項間で示されますが、

(図3«STAFERLA»)

ついで3項で、

(図4«STAFERLA»)

最後に4項目のaを加えます。

(図5«STAFERLA»)

p.4

このaですが、わたしはかなり以前から繰り返し言及してきました。昨年は、ご存知のように『ある「他者」から例の他者へ』というタイトルを付けました(訳注5)。この他者autre、小さな他者は既に評判のものでから定冠詞のエルを付けましたが、これは目論みあつてのことです。代数的にaのみで、またシニフィアンのもつ構造の面で示すとなるとこれは**対象a**としてなのです。

シニフィアンの構造の面で捉えるならば、この式が作用するその仕方から理解しなければなりません。式の仕組みが**四分の一回転**するように各項を記入してゆくことにより、式の働きの見方が変わってゆきます。(13ページ)このお馴染みの**四分の一回転**についてですが、かなり以前に述べています。ディスクールとは別の事柄を述べるに際してなのですが、とくに『**カントとサド**』のタイトルで執筆したものが刊行されてからでして、そのなかでの図がいつの日かゼットのシェーマといわれるものに限定されなくて見ていただけるよう、またこの**四分の一回転**がイメージの上での偶然の一致だけではない理由に基づいていることを判っていたいただきたいのです。

一例を示します。

((図6«STAFERLA»))

代数的文字の順列が乱れておらず、**四分の一回転**の規則に従って式が示されているならば、四つの式だけが得られるはずで、そのうち最初の式をいわば**出発点**と看做することができます。

((図7«STAFERLA»))

残りのふたつの式も紙の上で容易に書くことができます。

((図8«STAFERLA»))

これら全体は、ある仕掛けを特化したものにするため**だけに**構成されているわけではありません(訳注6)。仕掛けはなんらかの情景のようなものによって規定されてもおらず、現実世界la réalitéから抽象されたものなどまったくもち合わせていません。そうではなく、式そのものは件の現実世界なるものとして機能するもの、ディスクールによって構成される現実世界に既に記載されたものなのです。つまり、ディスクールはこの世界に既に存在して世界、少なくともわれわれが知りうる世界を支えているものなのです。既に記載されているだけでなく、世界における諸事象を橋渡しするための架け橋となっているのがディスクールなのです。

ここです。既に記されていますがそれだけでなく、これらの橋渡しをなして、**象徴的な連結**が…もちろん文字の形が重要なのではなく、それぞれが他と判別可能であればよいのです…**なにかが恒常的關係において現れてくる。形とはこうしたものです。**この形が示しているのはS1が…つまりわれわれ精神分析家のディスクールが展開するものの先にある**続き**が現れます。そしてこのディスクールはこの**続き**が現れる瞬間どのような方向性を与えるのが理に叶っているのか…S1が**既に他のシニフィアンによって構成されている場**に介入する瞬間です。つまり**シニフィアンというものが互いに結びつけられ、一方が他方にシステム上介入すると、これと同時に\$が現れるのですが、これはわれわれが分割された主体と呼んでいるものです。**式が示していることは以上です。ここに登場するそれぞれの項の地位について、今年はそのそれぞれの特徴を最大限引き出すことによって再評価することになります(訳注7)。

最後に、常に強調してきたことですが、以上の行程において、**喪失**として規定されるものが生じてきます。**文字**が示しているものですが、これはこう読めます。**対象(a)**と。(14ページ)われわれは常に失われた対象の機能を引き出してきた点を示し続けてきました。フロイトのディスクールのなかからです。語る存在における**反復**というものについての特別の意味に関わるものです。

断じて、生物学的な意味におけるどのような記憶の効果にでも**反復**というものが関わっているということではありません

ん。**反復**とは、知において、極限となっているもの、そしてこれは**享楽**と呼ばれますが、これとの間である種の間接関係をもっているものです。それゆえ、ある種の論理的結合が「**知は、他者の享楽である**」という定式において問題になります。〈他者〉のです、もちろん限定付きですが、というのこの〈他者〉を場として生じせしめるのがシニフィアンシニフィアンの介入であるという限りにおいてしか〈他者〉なんて存在しませんから。

おそらく、みなさんはわたしにこう言うのではないのでしょうか、結局**われわれはこの図式においては堂々巡りをしている**のでは、シニフィアン、〈他者〉、知、シニフィアン、〈他者〉、知、といった具合に。だがそこにおいて、**享楽**という語によりわれわれはこの心的図式に**挿入点**(訳注8)を示すことができるのです。そうすることによって、おそらく…**知**として正しく認められているものはなにかという問いから解放され…**限界へ**、そして**場外へ**、フロイトが自らに課している言葉で示されているように、外へとわれわれを向かわせることになるでしょう。このフロイトの言葉で言い表されたものはなんでしょうか。知ではありません。寧ろ**勘違い**です。ではこの**勘違い**からわれわれはこのフロイトの言葉をとくと考え直さなければなりません。なにしろ**限界**が設けられているのですから。そしてその上でシステムから外に出て行かねばなりません。

なにのの下に出てゆかなければならないのか。方向性を求めてということになると、あたかもシステムがこれを求めていたかようになります。システムは断じて方向性など求めていません。しかしわれわれ精神分析に携わる者は無力です。本年の講義のなかで折りにつけこの無力さに立ち戻ることになるでしょう。ですから方向性が必要なのです。そのひとつを示しましょう。**これは本当のことではありません**。しかしながらそれでも、確かなことは、われわれは多くの「**それは多分本当のことではありません**」があることを見るようになります。これを繰り返すうちわれわれはまさしく**真理の次元**(訳注9)というものを思い浮かべることになります。

p.5

まず、**欲動***Trieb*という語が曖昧に用いられてきたことについてですが、このカテゴリーがはっきりとした概念をもつようにしてゆかなければならないのに、精神分析諸派は手をこまねいてなにもしていません。これは、この語が用例を溯って行くことができ、かなり昔まで、カントまで溯ることができることも関連しているのでしょう。ともかくも歴史あるこの語が精神分析的ディスクールディスクール(訳注10)においても用いられてきて、これはこのディスクールにとって都合がよかったのだと言えましょう。*Trieb*のフランス語の**本能***instinct*が直ちに定訳となりはしませんでした。これは誤訳ですが、この誤訳へ到る迷走は理由がない訳ではないのです。

いずれにしても、われわれは以前からこの訳語上の逸脱がどのような性質のものか**根気づよく述べてきました**が、実情は**本能**という概念を取り込んで、これが当たり前のように利用されています。(15ページ)もちろん本能の概念が神格化されているわけではありません。**こんなことは論外です**。ともあれ、フロイトのディスクールにおいてもこの本能の概念が住みついていることを喚起しながらも、これとは違った住み方も可能にするようなディスクールを編み出す努力を惜しまないようにすることが肝心です。通説としては、本能の概念はある種の知の概念でもあります。知の概念だとしても、それがなにを意味しているのか知ることはできません。ただ、生命を維持することを目的とする知だと看做されており、これは不当な言い草ではありません。

一方で、フロイトが述べている**生命**の機能において不可欠な**快感原則**についてある意味を与えたとすれば、それが**緊張をできるだけ低い水準に保つ**ことなのだから、本性上、生命の機能に奉仕していると主張されるのですが、フロイトのディスクールのその続きはかれにとってこれを発展させてゆくしかなかったのです。経験、分析の経験からしてそうせざるを得なかったのです。分析の経験とはディスクールの構造なのですから。

というのも、忘れたはならないことがあるからです。それは**死の欲動**というものが人びとの行動から考え出されたものではないことです。ここにも**死の欲動**があります。皆さんたちと**わたしが言うこと**との間でなにかが起きているのです。

## 2

わたしは**わたしが言うこと**、と言い、わたしがここにいること、とはは言いませんでした。わたしが話すことなんてなんの役にも立ちません。結局、皆さんがここにいらっしゃって話を聞いてくださっているからなどということは判っているつもりです。だからといって、みなさん方のアシスタンスがわたしのために喋っているわけではありません【笑】(訳注11)。時には聴衆が話すこともあり、その場合は**わたしに代わって**話してくれるのですが、正当化できるものといえ、それがなにであれ、ここでわたしがなにか言うことです。なにかを言うことをわたしは「**この態度表明のエッセンス**」とでも呼びましょう。これがころころと場所を変え、その場所ごとに話し方を変え、参加する方たちも変わってきたのです。

どこかでこの本質に立ち戻らうと機会を窺ってきたのですが、今日は、その日だと思います。今日この最適な場所でご指摘したいことは、この**場所**というものがわたしが「**この態度表明**」と呼ぶものの**スタイルを決める**ために重要な役割を与えてきたのです。**態度表明**とは、この機を逃して言わないわけにはいきません、態度表明とはもっと馴染みやすい意味でいうと**解釈**というものと関係をもっているのです。皆さんたち参加者により、のために、のなかで、わたしが言ってきたことは、その都度、このその都度をわたしは、嘗て、皆さんたちに地理学的場所と定義しましたが、その場所は解釈の対象だったのです。この話に戻るの、解釈が回転する**四肢の構造**を取り、今日からこの構造の活用を始めるからです。(16ページ)しかしいきなりこれを始め皆さんたちを当惑させないためにこのことだけは言うておきましょう。つまり仮にわたしに解釈をしるというならば、お断りしますがこの場合の**解釈**という語について説明するたなると、それは**分析的解**

釈とは正反対の意味となります。**分析的解釈**が如何に解釈という語の通常の意味とはあべこべなのか、例えばサンタンヌでのわたしの**解釈**に話を絞ってみてください、元い、仮にわたしに解釈をしるというのならば、こういうことになってまいります。つまり心の琴線に触れるような話題とは**冗談**ですと。

サンタンヌでのセミナーの聴衆の典型は… おそらく医学系でしょうが、医学生、医師でない参加者も何人かいました… かれらはわたしのお話の**ギャグ**の連発を助長していたのです。これがこの10年間においての**わたしの態度表明のエッセンス**だったと捉えましょう。ついでに証拠をひとつ。この傾向が顕著になったのは、ある学期に**機知の分析**を取り上げるようになってからのことです(訳注12)。【笑】

余談が長くなりました。ぐずぐずしてはまずいですね。ただ機知についての**解釈**で特徴的なものを言い足します。みなさんがこの前わたしとお別れたところ、高等師範学校での解釈の特徴についてです。E.N.S.、この略字は実にうまくできています。**存在者**という言葉を巡って話は巡ってゆくのです。**文字の同音異義**を利用しない手はありませんよ(訳注13)。また、これが**教育するenseigner**の最初の3文字であることも重要です。ということで、ユルム街においてわたしが話していたことは**教育**であったことに気づいたのです。E.N.S.以前のセミナーでは明らかではなく、認められてもいませんでした。教授連中、特に医師たちはわたしを危険視していました。

医学的でないことが**教育**という名に値するという事実にひどい懐疑心を抱かせたのです。**カイエ・プール・ラナリーズ**(訳注14)の若者たちが現れて流れが変わったのです。この片隅でかれらは育ってきたのです。この片隅という語をわたしはそれ以前からずっと使ってきました。まさに**ギャグ**の時代の頃です。このギャグの効果があったのかどうかわかりませんが、わたしの教育は成功でした。

かれらがわたしが喋ったことをそのように解釈したこと— 今ここでわたしが言う解釈とは別の解釈です。分析的解釈は… — は重要な意味をもちます。もちろん、ここではどうなるのか予測はできません。法学部の学生たちがやって来るのか、だがこのことは重要なことでしょう。とても重要なことでしょう(17ページ)。会場を変えてきたことによりセミナーに3つの時期が画定されることになりましたが、今度のおそらく3つのなかで一番重要なものとなるのではないのでしょうか。なにせ、今年は、**精神分析を裏側から**捉えることになるからです。

おそらく、**精神分析に法的と呼ばれるステータス**を与えることになるでしょう。いずれにしても、このステータスというものは、常に、そして究極的に、**ディスクールの構造**と関連づけられてきました。法というものの以外において、ディスクールが現実の世界を構造づける**様**を捉えることなどできないでしょう。

p.6

それゆえ、われわれがここでセミナーを行なうのは理に叶っているのです。単に地の利がよいからこの場所を提供しただけだという幸運に与った訳ではありません。**みなさん方にとってもそれほど場所の移動ではない**でしょう。特にユルム街に通っていらっしゃる方たちにとっては悪くはないでしょう。駐車場はどうか判りませんが。相変わらずユルムの駐車場をご利用になられている方もいらっしゃるのでは。

### 3

精神分析での**本能**、知の話だったですよ。この知ですが、つまるところ、ビシャが生命について定義していますがそのことに関する知です。かれはこう言っています、「**生命とは、死に対して抵抗する力の総体である**」。含蓄のある定義です。よく吟味して読んでいただければけっして空虚な内容をもったいぶって言っている表現ではありません。

フロイトがニルヴァーナへと坂を下って行くことに対する生命の抵抗について述べている部分を読んでください。嘗て**死の欲動**が示されたときと同様な導入部分です。おそらく、精神分析という**ディスクール**を扱う経験において顔を覗かせるのもこの無生物へ向かう下り坂なのでしょう。フロイトはそこまで進みました。ところでかれが言っているように、この儂い泡状のもの… この『**快感原則の彼岸**』のページを読み連ねるにつけ迫ってくるイメージです… それは、生命というものは一旦道を進み始めれば常に同じコースを辿るということです。

どういふことか。他にありようがあり得ませんから言いますが、本能、とはある知への連座なのですが、この本能という概念において見出すことのできる真の意味がここにあるのです。この道、嘗て知られているものですが、それは先祖伝来の智慧なのです。この智慧、知とはいかなるものか。いみじくもフロイトは**快感原則**、**現実原則**の向こう側に、『**快感原則の彼岸**』という言葉を導入しましたが、ところがこの言葉は逆転させて捉えるべきです。知とは生命が極限つまり享楽へ向かうのを止めるものです。というのも、死へ向かう道— ことが肝要です、マゾヒスムスについてのディスクールとなるでしょう— (18ページ)死へ向かう道、これこそ正に**享楽**と呼ばれているものです。**享楽**と**知**とのあいだには根源的な関係があります。まさにここに、**シニフィアン**と言われているものによって成り立っている仕掛けが出来上がるとき現れてくるものが仲立ちします。それゆえ、こう考えることも可能です。つまりこのシニフィアンの発現を関数の働きのように捉えることができますと。

この説明はこれくらいで十分でしょう。すべて説明する必要などないですよ。言語の起源についての説明だってそうでしょう。どなたも納得でしょうが、ある**知**を構造的にきちんと提示するに際して起源の問題は問わないことです。いま問題にしていることは、今年これから話を展開させて行くにあたってはどうでもよいことです。構造という次元での話となるのですから。くだくだと説明はしません。既に述べたようにわれわれのやるべきことに専念しようではありませんか。

では先に進みましょう。ある**享楽**による接合点において一 享楽ならなんでもよい訳ではありません。だがこう言うだけではなんのこともだかはっきりしないでしょー 一 **享楽**のなかでも特権的な**享楽**がもつ接合点において一 性的享楽のことではありません。接合点にあつてなにかを示している以上、それは性的享楽の喪失を、**去勢**を示しているのです。性的享楽との接合点に関係してフロイトの反復についての神話において見えて来るものがあります。神話とは相容れず不確かなものではなくはっきりと図式で示すことのできるものです。まずS1です。次いでこれがS2を巡って繰り返して現れて来るのです。このS1とS2との関係性から主体が現れるのですが、この主体はなにものかによって代表されるのです。**このなにものかとはなにかの喪失であり**、ここから**両義性**を理解しようとする方向への努力が必要になってくるのです。

件の対象について、ずっとこれを分析中に生ずる拒絶frustrationを巡って捉えてきましたが、一方で昨年はこの同じ**対象**を**剰余享楽**と呼びましたが所以なきことではありません。つまり対象喪失、それは裂け目であり、何かしらに開かれた穴でありそれが享楽の欠如を表すものかどうか解りませんが知の過程に位置づけられているのであり、これがそこでまったく異なったアクセントを賦与され、これは**知**がシニフィアンによって区切りを付けられるようになることによってです。でも対象(a)と剰余享楽、これは同一のものでしょうか。

**享楽**との関係は矢庭に未だ潜在的に機能によって際立ってきます。そしてこの潜在的機能とは**欲望**の機能のことです。ですからわたしは**剰余-享楽**を持ち出すのです。無理矢理挿入するとか侵犯してではないのです… (19ページ)ほんの少し脈絡のないお喋りを赦してください。分析がなにかを示しているとするならば、パレスが屍体の魂について、この魂は謔言を言っていますが(訳注15)、これとは一寸違った魂をもった人たちのことをここで引き合いに出しているのです。分析が示していることは、彼らの魂はと口ごもりながら言いますが、そのことで**なにも侵犯してはいない**のです。忍び込むことは侵犯することではありません。戸が半開きになっているのを見ることは戸をこじ開けてなかに入ることではないのです。わたしが今説明しようとしていることがそのうちお分かりになるでしょう。

これは侵犯ではありません。むしろ突然舞い降りてくるものです。で享楽となにか関係しているのです。つまり**利潤**を得られるのです。利潤が得られるから、たぶん得られそうだから**支払う**べきなのです。このことで昨年、この剰余-享楽について、わたしは皆さんにこう言いました。マルクスにあって、**(a)**はかれのものです、他ならぬ精神分析的ディスクールが理論化する次元においては、**剰余-享楽**として機能するものとして認められます。マルクスが発見するのはこれです。剰余-価値となるものです。というのも、マルクスは**剰余-価値**を**もちろんのこと発明した**ではありません。ただし、かれ以前は誰もこれをどの場所に位置付けたいのか判りませんでした。**この場所は両義的で**、すでに申し上げたとおり、余分な労働、**剰余-労働**でもあるのです。

p.7

で、**なんのために支払うのか、享楽のためでなければ**、とマルクスは言います。で、この享楽はどこに入るのか。ややこしいことは、享楽のために支払うとなると、その享楽を所有することになり、そこから直ちにこの享楽を消費する必要はありません。もし消費してしまえば、おしまいになりますからね。しばし、そのものに手をつけなくて放っておくこと。

#### 4

なにを言いたいのか説明しましょう。お分かりいただきたいのは、この四肢構造を四つの場所に配置させると、**四つの根源的なディスクール**が規定されることとなります。次の形のもの**が最初に来るようにした**のはたまたまではありません。

((図9«STAFERLA»))

しかし別のものから、例えば先に示した左の形のものから話を始めることができない訳ではありません。

((図10«STAFERLA»))

最初の形のは歴史的な理由から最初のものとして規定できるのです。この形が言い表していることは、**このシニフィアン(S1:訳者)が、別のシニフィアンとの関係で主体を代表している**ことから、そこから出発しているということです。この形が重要なのは、ここから、今年、わたしたちは話を進め、これを**主人のディスクール**と呼ぶことにして、すべての形、4つの形のなかにおいて位置付けられるようになるからです。**主人のディスクール**にみなさん方が**歴史的**の重要性を与えるように取り計らうことは故なきことではありません。だってそうでしょう。みなさん方はいわゆる大学人としてえり抜きの方たちですし、哲学が専ら扱うのはこのことであることを知らない訳がないでしょうから。

哲学が専ら扱うのがそれ、つまり**哲学はそう呼んでいるのであり**、突出してそうなのはヘーゲルにおいてであり、ヘーゲルによって有名になったのですが、これをさて置きます。すでに明らかになっていることですが、**主人のディスクールの**領野、次元において現れてきたのがわたし達に関わる、ディスクールをめぐってわたし達に関わるもの、その両義性はともかく、それが哲学と呼ばれているものです。

さて、今日はここまで皆さんをお連れしてよいのやら判りかねますが、件の**四つのディスクール**を回転させ一巡りさせるとなるとぐずぐずはできないことは断っておきましょう。他のディスクールはどう呼ばれるか。直ちに言います。いい

ですか。皆さんの食指を動かす程度にです。

(図11「STAFERLA」)

左側のものは**ヒステリー者のディスクール**です。形だけではすぐヒステリー的とは見えないですか[笑]。そう見えないとしても説明しお解り頂けるようにします。そして別のふたつです。ひとつは**分析家のディスクール**です。そしてもうひとつです。いやはや、これは言わぬが花ですか[笑]。端的に説明しないのは、今日この語を使うとなるとひどい誤解を招く恐れがあるからだけです。詰まるところ、お解りいただけるこのようになりますが、これは優れてアクチュアリティをもったディスクールなのです。では**主人のディスクール**に戻りましょう。今度はここにある代数的仕掛けの表記を配置することによって**主人のディスクール**の構造を示します。

(図12「STAFERLA」)

ここにS1が来ます。端的に言うとシニフィアンです。シニフィアンの機能によって主人のエッセンスは支えられているのです。ご記憶と思いますが、このS1の隣ですが、昨年、繰り返し強調致しましたが、**奴隷に固有のフィールドですが、それは知、S2**です。古代ギリシャに書かれた文書記録を読めば疑う余地はありませんが、ともかくも主人のディスクールは奴隷の生活によって成り立っていたのです。この点についてはアリストテレスの**政治学**を読んでください。主人のディスクールに関してわたしが奴隷について話を持ち出すとしたら、それは奴隷が**知の支え**となっていたことは疑いようがありません。

奴隷の地位について定義するとすると、古代においては奴隷は、現代の新奴隷同様、単なる階級ではなく、家族の成員でもあったことを断っておかねばなりません。アリストテレスによれば、奴隷は国家においてと同様、あるいはそれ以上に家庭のなかに居場所があったのです。なぜならば、奴隷は**ノウハウ**を持ち合わせていたからです。

p.8

これは極めて重要なことです。なぜならば、知が己を知っているのか、主体は自己を全き透明な知の地平の上に人間の主体を築くことが許されるのかといった問いを立てる前に、**ノウハウ**集のデータ・ベースからデータを吸い上げてしまう術を使いこなすことが必要なのです。ところで、哲学において起きてきたこととしてその方向性を与えたもので第一歩は、皆さんは皆さんそれぞれの方向性があるでしょうが、この第一歩については唯々有難いことにプラトンが手掛かりを与えてくれます。

ただ押さえておいていただきたいことは、われわれ精神分析を志す者にとっては、就中あるものにある意味があるのは、位置を定めることによってであり、**これはものごとをあるべき場所に戻す**(STAFERLA版ではこれが現実界の定義であるとしている)ことに他ならないという点です。哲学がその歴史において目指してきたことは、それは、盗み、誘拐、奴隷からの知の窃取であり、これは**主人**の作戦司令のもとに行われてきたのです。それには一寸した実践で事足ります。なぜがわたしは、16歳の頃からわたしの言うことを聞いてくれるひと達にはこの実践を身につけてもらっていました。プラトンの対話篇における一寸した実践に做えばこの哲学の伝統に気づきますから。

知の二つの側面と呼ぶことにしますが、この二つの側面が向かうのはなにか。ノウハウは動物の知に似通っています。しかしながら奴隷のノウハウは、もちろんのこと、動物の場合と異なり言語網という装置が備わっています。もちろんかなり発達した言語網です。この装置、この完成度の高い装置を二番目の階層部分とします、これにより知が伝達されるのです。いわば奴隷のポケットから主人のポケットへと伝達されるのです。この時代にポケットはなかったかもしれませんが。

そして**エビステーメー**といわれるものから知を引き出そうとする努力、このエビステーメーという奇妙な語を皆さんは深く掘り下げて考えたことがあったでしょうか、「**良い位置を占める**」という語義があります。ドイツ語の**Vorstellung**も同じです(訳注16)。知が主人の知となるためには良い位置を見つけることです。伝達可能な知としての**エビステーメー**の役割は、それだけで特別なものとなっています。プラトンの対話篇をご覧ください。エビステーメーの役割は常に職人的技術に頼っています。職人的とはパトロンに従属的な態度をいいます。重要なことは、エッセンスを抽出することで、これにより知は主人の知となるのです。

それですが、こういう話をしていってしつぱ返しを受けます。えーとなんて言いましたでしたか…これをラブシュスと言いますよね、一種の**抑圧の回帰**です。何某かですが、カリマコスでしたか、そうではなく…結局なにが言いたいのか、**メノン**を参照してください。ルート2の問題が出てくる場面ですよ。無理数の問題です…ひとりが言います、「**ほら、奴隷ですよ、かれに来てもらいたいですね。坊ちゃんの方です。かれは知っていますよ**」

かれに質問が出ます。もちろん主人の質問です、そして奴隷の方は当然、この質問に答えるわけですが、質問が既に答えを含んでいるような風になされるのです。これでは答える側に対してお役御免を突きつけ、軽蔑の眼で、愚弄している風に、あたかもフライパンで具を手先で裏返すように簡単に捌かれているように描かれていますが、本当のところは、奴隷が知っているのだし、この侮蔑的態度の遠回しによって白状しているわけですが、それはこの態度の下に隠されたもの、つまり**知の次元における奴隷の役割でありこれを奴隷から奪っている**様なのです。

そしてこのことは、先ほど申し上げたことに方向性を与えることに違いはありませんが、この話の続き、**奴隷の役割**をどう捉えるかですが、これは次回にいたします。しかしながらこの話の発端は昨年既に示しています。つまり**享楽**に関

するものです。神話、絵に描かれたような神話に過ぎないものですが、しかし誰でも自分の利益になることは知っていますながら、よく言われる、**享楽とは主人の特権である**ことについては心の奥底に仕舞い否認しているのです。これが**主人のステータス**というものなのです。

今年のセミナーの導入部分としては、われわれ精神分析に携わる者にとってこの主人のステータスがどれ程深く関わっているのかを皆さんにお伝えするに止めたいのですが、このステータスそのものについての話は次のステップとしてお預けとします。どれだけわれわれにかかわっているのか、それが見え隠れし、また同時に風景の片隅に後退する度です。つまり哲学の役割についての話です。

哲学の役割となると、時間の関係上、そして今年は例年と比べ短い時間のなかでお話ししなくてはならないので、これを展開するまでには至らないでしょう。気になさらないでください。どなたかがこのテーマをもう一度取り上げていただければと願っています。好きなようにやっていただきたいです。**哲学がその歴史で果たしてきたことは探取**、背信行為でありこれが奴隷の知に圧力をかけ、そこから主人の知を生むような錬金術を操っていたのです。**科学**としてわれわれの前に現れてきてわれわれを支配するようにしたのもこの主人の作戦司令の賜物だといえるのか。これを肯首するかどうかは時期尚早でしょう。

つまり**エビステーメー**という思慮深きものが知の二分法にすべて依かかっている以上、それが到達できた知は厳密な意味でアリストテレス自身の役に立ちかねが主人の知の特徴だとした**理論的知**を指しているからです。

この理論的知について、当然ながら、われわれは漠然とした意味で捉えてはなりません。そうではなく、アリストテレスが**テオリア**という語で**強調した意味において**考えるならば、奇妙なことではありますが、それはちょうど、このことについては再び取り上げることになりますが、というのもわたしの考えではこれは**スポットライトが当てられた中心に来る点**だからです。それはちょうど、この知について到達を断念した時点、このことについてはなお十分な理解が得られていないと言えましょうが、ある人が、S1とS2との緊密な関係について、いみじくも最初にこの関係から主体の役割というものを引き出した日以来のことなのです。

わたしはデカルトの名を挙げました。もちろん皆さんたちに肖ってです。このことはデカルト研究の専門家のかんりの方たちからも共感を得ています。

p.9

時代ごとに**奴隷から主人への知の移譲**、その再出発の試みのターニングポイントが現れますし、このターニングポイントはそこでは、なんらかの方法によって**言表**のあらゆる機能を構造のなかに組み入れることの契機となるだけです。言表とはシニフィアンの結びつきによって支えられているものですし、今年わたしが皆さんにお示ししているわたしの労作にちょっとした閃きを読み取っていただきたいです。もちろんそれで終わりではありません。というのも、わたしの話もそのような閃きがやってきたら、その瞬間には、この話は少なくとも自明なことを再確認するのに役立つことになるのです。自明なこととは、**哲学は嘗て主人の利益のためになされた幻惑とは別のものたり得たことがあったのだろうか**、という疑問に否と断ずることです。その瞬間とはどの瞬間なのか、もちろんこの問いにも立ち戻ります。

もう一方で、ヘーゲルの**ディスクール**、**その極みである「絶対知**」というものもあります。われわれ精神分析に携わる者の**知**に対する心構えに即した、言うならば道義(définition---principielle)(訳注17)から出発するならば、**絶対知**とは一体なにか。このような問いから次回のセミナーでは話が始まります。出発点のうちのひとつでしょう。もうひとつの出発点は、これも蔑ろにできないものです。これは巨大ではあるがこの巨大さが就中健全性に繋がるようなそれであり、精神分析家が**欲望**というものに関わる時に、のびきならぬ仕事を引き受けることから巨大さと表現できるものなのです。精神分析が分析家に**頑なに**遵守を迫るものがあるとするならば、それは**知の欲望**であり、これは知とはなんの関係も持たないものなのです。分析家は「**侵犯**」という際どいことばをことばだけで済ませます。

教育的見地からすると最悪の結果をもたらすことになるような究極の特徴というもの精神分析にはあり、それは知の欲望は知へには導かないという特徴です。このことは、そうわたしは考えますが、多少とも長い延期を伴います。この延期がディスクールそのものなのです。しかしながら最後にある問いが立てられます。すなわち**主人は…主人は、移動についての作戦司令を発し、こう言って良ければ奴隷の知の資金移動(訳注18)を展開し…このことを主人は知ろうとしているのであろうか、知ることへの欲望をもっているものであろうか。**

そうではない証拠には、つい暫く前より、一般的傾向として、本当の主人はますます、まったくこのことを知ることを欲しくなりつつあり、しかしながらうまく知を手にいれようとしています。知ること必要性など有りやしませんから。

今日はここで終わりにします。少しは興味を唆っていただけたならばと思います。そのような方がいらっしゃれば、次回おっしゃってください。

p.10

(訳注1)assistanceは「出席」、「援助」と異なる語義がありこれを両義的につかっているのであろう。

(訳注2)おそらく2度目の追放が決まり、当セミナーが行われるパンテオンでの受け入れが決まる前の時期のことであろう。ノマードの身であるラカンのご機嫌斜めであり、さかんに弁明していますが文字通り八つ当たり等に等しい。バイクと



しておいたが、これは当時、知識人のシンボルでもあったSolexであろう。Solexは日本で言う原付で、モーターは前車輪の上部に据え付けられていて、レヴァーを手前に引くと駆動オンとなるのでdéchrocherという語が用いられているのであろう。

(訳注3)テープ録音では以下のようにになっている。

Je n'en donnerai pour preuve que ceci : c'est que dans un texte qui est daté de 1966, et nommément dans une de ces introductions que j'ai faites, au moment du recueil de mes *Écrits*, une de ces introductions qui scandent ce recueil, qui s'appelle *De nos antécédents*...

- ça se trouve si mon souvenir est bon - et si je l'ai bien noté à la page 68

...je fais très précisément allusion, ou plus exactement je caractérise, ce qu'il en a été du « *discours* - comme je m'exprime - *d'une reprise* - dis-je - *du projet freudien à l'envers* ».

ミレールはいじり過ぎではないであろうか。

(訳注4)テープ録音。

Voilà la relation fondamentale,  
図2

celle que je désigne pour être d'où résulte l'émergence de ceci que nous appelons le *sujet*, ceci de par le signifiant qui en l'occasion fonctionne comme le *représentant* - ce *sujet* - *auprès d'un autre signifiant*. Qu'en est-il, comment situer cette *forme fondamentale*, cette *forme* que si vous voulez bien, sans plus attendre, nous allons cette année écrire, non plus - comme je le disais l'année dernière - *comme l'extériorité du signifiant S1*, celui d'où part *notre définition du discours* tel que nous allons l'accentuer en ce premier pas.  
に従った。

ミレール版では

... c'est-à-dire ce qui se passe de par la relation fondamentale, celle que je définis d'un signifiant à un autre signifiant. D'où résulte l'émergence de ceci, que nous appelons le sujet — de par le signifiant qui, en l'occasion, fonctionne comme le représentant, ce sujet, auprès d'un autre signifiant.

Comment situer cette forme fondamentale ? Cette forme, si vous voulez bien, sans plus attendre, nous allons cette année l'écriture d'une façon nouvelle. Je l'avais fait l'année dernière de l'extériorité du signifiant S1, celui d'où part notre définition du discours tel que nous allons l'accentuer en ce premier pas, à un cercle marqué du sigle du A, c'est-à-dire champ du grand Autre.

と図を省略して文章で補っている。

(訳注5)ミレール版では

... l'année dernière, puisque, depuis assez longtemps le séminaire était fait pour ça - D'un Autre à l'autre

となっているが、テープ録音ではこのassez longtempsという語は認められない。

本訳ではこの部分を省いた。

(訳注6)ミレール版では、Cela n'est que pour spécifier un appareil ...と書かれており、テープ録音のCela n'est pas que pour spécifier un appareilと意味が逆になっている。

(訳注7)テープ録音では

Telle est cette forme, en tant qu'elle dit que c'est au point - à l'instant même - où le S<sub>1</sub>...

c'est la suite de ce que développera ici

notre discours qui nous dira quel sens

il convient de donner à ce moment là

...c'est au moment où ce S<sub>1</sub> intervient dans le champ déjà constitué des autres signifiants en tant qu'ils s'articulent déjà entre eux comme tels,

qu'à intervenir auprès d'un autre de ce système, surgit ceci :

S, qui est ce que nous avons appelé le sujet comme divisé.

となっているが、ミレールは

Telle est cette formule.

Que dit-elle ? Elle situe un moment. C'est la suite de ce que développera ici notre discours, qui nous dira quel sens il convient de donner à ce moment. Elle dit que c'est à l'instant même où le S<sub>2</sub> intervient dans le champ déjà constitué des autres signifiants en tant qu'ils s'articulent déjà entre eux comme tels, qu'à intervenir auprès d'un autre, de système, surgit

ceci, \$, qui est ce que nous avons appelé le sujet comme divisé. Tout le statut en est à reprendre cette année, avec son accent fort.

ここでの式とはそのようなものです。

式はなにを示しているのでしょうか。ある瞬間を設定するのです。それはわれわれのディスクールがここで展開することになるものの続きです。そしてわれわれのディスクールはこの瞬間にどのような意味を与えたらよいのか教えてください。式が示していることは、S1が既に他のシニフィアンによって構成されている場に介入し、つまりシニフィアンというものが互いに結びつけられ、一方が他方にシステム上介入するとなると、これと同時に\$が現れるのですが、これをわれわれは分割された主体と呼んでいるものです。式が示していることは以上です。ここに登場するそれぞれの項の地位について、今年はそれぞれの特徴を最大限引き出すことによって再評価することになります。

としている。

(訳注8)<http://www.bibliotheques-psy.com/spip.php?article1072>において、この挿入点point d'insertionについて、簡明な説明をみることができる。このセミナーにおいては、対象aはもはや欲動の対象、象徴的喪失の対象などではなく、つまり剰余享楽として示される。この剰余享楽そのものがシニフィアン組織における挿入点で、それは享楽であり、これを機に肉体は享楽の刻印を受けることとなる。<http://cripsa.over-blog.com/article-5348646.html>においては、ミレールによる解説が紹介されている。一方では、 $X \text{ rapport } J \Rightarrow S$ で示される主体の享楽に対する言葉では言い尽くせない、シニフィアンには達していないなにかとの関係、さらに $S1 \text{ } S2 \Rightarrow A$ で示される「他者」への関係に捉えられる主体、シニフィアンの発展の式が示される。このふたつの式の間項としてシニフィアンが与えられる。最初の式のSに到る言葉に尽くせない関係にこのシニフィアンを記入することができ、挿入点とはこのシニフィアンが記入される点である。

(訳注9)ラカンはラブシュスで次元dimensionというところdémisionと言ってしまい会場からは笑いどよめきが起こる。ラカンは確信的にラブシュスもどき間違いを犯し、セミナー自体もう行わないようになることがかれの願望であるようなポーズを示すことが多いが、本心は …。

(訳注10)以前にも何度か指摘したとおり(例えばLes non-dupes errentの小生の解説にもあるように)discours du psychanalysteとdiscours psychanalytiqueはコンテキストによりその意味するところの異同を読み取るべきである。ここではもちろん、discours du psychanalysteとは関係がない。

(注11)冒頭の謝辞で同様、assistanceを二重に意味に込めてラカンは言っている。参加(者)と援助を掛けているのであるが、訳者はこの種のものには親父ギャグの域を超えるものではないものと思っている。それでも聴衆は笑いで答えてくれる。

(訳注12)集中して取りあげているのは、1957年11月6日から同12月18日にかけての7回のセミナーにおいてである。

(訳注13)原文はÇa tourne autour de l'étantに続く部分であり、étant(仏語)=ens(ラテン語)=存在者であるから、ensとE.N.S.は同音異義となる。cf. <https://fr.wiktionary.org/wiki/ens>

(訳注14)Cahiers pour l'analyse誌は1966-69年にE.N.S.出身の若き哲学サークルの手によって10巻が出版されている。

(訳注15)cf. Maurice Barrès, Le roman de l'énergie nationale ; LEURS FIGURES, chapitre VIII, Le cadavre bafouille, pp. 113~

(訳注16)ミレールはverstehenとしているが、誤りであろう。

(訳注17)wiktionnaireによれば、principeに接尾語ielを付けて用いたのはロラン・バルトであるとされているが、先例があるとも書かれている。

(訳注18)ラカンのラブシュスではないだろうか、資金移動はvirement bancaireであるが、ラカンはvirage bancaireと言っている。